

〈再 録〉

スギ材の利用にあたって心材の耐朽性をどう理解するか

酒井 温子*

木材保存, 49 (3), 107-113 (2023)

スギは、全国の人工林で植栽され、蓄積量も多く、今後も、国産材の中心となる樹種である。本報告では、近年のスギ心材の耐朽性に関する研究を紹介し、耐朽性の面から見た特徴や留意点を解説した。

スギ心材の耐朽性は、木材保存学のテキスト等で、また住宅金融支援機構が発行する木造住宅工事仕様書において「中」に区分されている。しかし、実際に行われた耐朽性試験の結果を見ると、耐朽性が高いものから低いものまで多様であり、それらを平均して「中」と表現してきたようである。また、人工乾燥に伴い、耐朽性の低下を示す研究結果もある。

このため、スギ心材の利用にあたっては、特定の地域や品種で確認された正確な耐朽性試験データがないのであれば、安全側で考えて、「スギ心材は、木材腐朽菌が活動しない環境、すなわち木材の含水率が30%を超えない場所で使う」または「木材の含水率が30%を超えて腐朽の発生が懸念される場所で使うのであれば、保存処理（薬剤処理、熱処理等）を行う」かのいずれかが適切と思われる。

なお、スギ辺材については、心材よりも常に耐朽性は低く腐朽しやすいことから、使用環境に応じた利用となるよう、十分な配慮が必要である。

キーワード：スギ心材、耐朽性、利用

* 元 奈良県森林技術センター